

平成25年2月NHK中央放送番組審議会（議事概要）

2月のNHK中央放送番組審議会は、18日（月）、NHK放送センターにおいて、13人の委員が出席して開かれた。

会議では、まず、視聴番組「為末大が読み解く！勝利へのセオリー スペシャル 世界とたたかう“逆転”の戦略」について坂元報道局スポーツセンター チーフ・プロデューサーから説明があり、放送番組一般も含めて活発に意見の交換を行った。

最後に、放送番組モニター報告と視聴者意向報告、3月の番組編成の説明が行われ、会議を終了した。

（出席委員）

委員長	福井 俊彦（前日本銀行総裁）
副委員長	岸本 葉子（エッセイスト）
委員	青柳 正規（国立西洋美術館館長）
	大野 博人（朝日新聞社役員待遇論説主幹）
	倉重 篤郎（毎日新聞社論説委員長）
	紫 舟（書家）
	平 朝彦（独立行政法人海洋研究開発機構理事長）
	龍井 葉二（連合総合生活開発研究所副所長）
	田中ウヰェ京（(株)MJコンテス代表取締役、メンタルトレーナー）
	富士 重夫（全国農業協同組合中央会専務理事）
	細谷 亮太（聖路加国際病院副院長、小児総合医療センター長）
	若月 壽子（主婦連合会事務局）
	和田 章（社団法人日本建築学会会長）

(主な発言)

<為末大が読み解く！勝利へのセオリー スペシャル

「世界とたたかう“逆転”の戦略」(BS1 1月3日(木)放送)について>

- おもしろい番組だった。番組の中で、男性と女性の違いについて言及していたが、それが適切であったのか疑問だった。また、スポーツとビジネスの世界を比べていたが、オリンピックや世界選手権に向けて努力をすることと、ビジネスの管理、指導、事業の成功を無理に比べないほうがよいと思った。スポーツの指導に関しては、バスケットボール部の体罰による生徒の自殺という出来事があったが、そういったことも考えながら取り上げていくべきではないか。

(NHK側)

体罰のことは番組でも意識している。番組としても体罰に対するアンチテーゼとして、指導のあり方や若い人の育成について、さまざまな方法があることを提示していきたい。実績を残した人、指導を受ける側からも評価が高い人のことばは、指導のあり方やコミュニケーションの取り方として、よい手がかりになると考えている。

- バレーボール女子日本代表の眞鍋政義監督が、試合中にタブレット端末を見て何をしているのか、従来の根性型とは異なり、データ型と言われているのは何が変わったのか、そこを知りたかった。リーダー論というねらいはわかるが、実際にプレーしているのは選手だ。監督の視点は出ていたが、意識改革によって、選手たちがどう感じ、どう変わったのかも知りたかった。ビジネスで応用の利く教訓もあると思うが、教訓風にまとめると逆にインパクトが弱くなるので、あまり無理に結びつけようとしたくないほうがよい。
- とてもおもしろかった。「世界とたたかう“逆転”の戦略」をぜひ知りたいと思う一方で、日本は世界と戦うための戦略や勝つための技術を、スポーツでも産業でも、簡単に流出させすぎではないかと気になった。
- 野球などのスポーツで、データを駆使してさまざまな戦略を立てることは、ある意味古い話であり、これまでも行われてきたことだ。眞鍋監督の戦略のポイントは、データを重視して決断の材料にしたことで、組織を束ねるためのツールとして使い、スタッフも組織化し、きちんと戦略をもって進めたことだと思うが、これが

新しい視点かということとそれほど目新しいという感じはしない。

「マネー・ボール」という有名な本がある。大リーグのオークランド・アスレチックスというチームが、選手の平均年俵が最も低い中で勝っていくという話で、映画化もされた。アスレチックスは、野球というスポーツを統計的に処理し、統計的に有利だがあまり注目されていなかった選手を集め、低コストでプレーオフに進出するチームを作ったのだが、その話に比べると、この番組はいまひとつインパクトに欠けた気がする。

また、スポーツの方法論は、日本の組織のあり方や社会の現場に通じるものがあると思う。現場は、野球であろうがバレーボールであろうが同じであり、オリジナルなデータを作って、それを読み解き、組織運営に生かしていく。特に人をどのように客観化していくかということがポイントだ。そのメッセージは十分に伝わっていたので、よい番組だったと思う。しかし、あまりその部分を強調してしまうと、単なるサクセスストーリーになってしまう。ナビゲーターの為末大さんには失敗談などの陰の部分の深く読み解いて、指導者と一緒に考えていくような進め方で、掘り起こしてもらうことが必要だったのではないか。

(NHK側)

無理に実社会とスポーツの世界を結びつけることで、勝負の“あや”だったり、ヒューマンな部分など、番組の味わいの部分が伝わりにくくならないように気をつけて、演出方法を改善していきたい。サクセスストーリーの中に、さまざまな試行錯誤や“トライ・アンド・チェンジ”のプロセスをきちんと深読みできるようになることが、番組の目指すべきものだと考えている。

今回は、データを活用したバレーボールを取り上げたが、今後は個人スポーツをはじめ、さまざまな競技や選手を取り上げていく。個人でメンタルや肉体のトレーナーなどを集めてチームを組み、組織づくりから戦略づくりまで行っている事例や、海外の指導者、スクールなど、さまざまな活躍の事例や関心の高いものにスポットを当てていきたい。

- いまスポーツに人気があるのは、世界がボーダレスに相互交錯している中で、輪郭がはっきりして、その中で完結していること、原因と目的と結果があって、作戦、戦略がストレートに結果として出るからだ。世界が複雑になればなるほど、スポーツの仕組みとわれわれの社会の仕組みはますますかい離して、だからこそ人気が出る。そのため、これからもこうした番組は人気が出ると思うが、それを実社会に適

合させようとする、とんでもなく距離がある。そういうことを認識し、軽やかさと自虐気味なところ、遊びの部分を入れて作れば大人の番組になると思う。世間が複雑になるなか、閉ざされた世界はみんながあこがれる世界であり、そのことを作る側がどれだけ認識しているかが、番組の厚みを増すことにつながると思う。

- 医療の領域でも、データにのっとった“エビデンス・ベースド・メディスン（根拠に基づく医療）”と“ナラティブ（語らせること）”によって浮き上がってくる人間の両方がないと成立しないところがある。ヒューマンな面を見せるために、スターティングメンバーに起用した控えの選手に、欠場した選手のユニフォームを内側に着て試合に出場することをたずねていたエピソードは、多少わざとらしく感じた。選手ひとりずつの関係や、選手自身がデータで操られることについてどう感じているのかなどについて、また、チームプレーと個人で競技することの違いや、データで操られることの意味合いなどを、為末さんが“走る哲学者”として、突っ込んでいけばおもしろかったのではないか。
- 番組を見て、スポーツの世界が分業化されていることや、それを監督やコーチが個性でとりまとめていることもよくわかった。試合中にコートでデータを入力しているアナリストに驚いた。コートを45分割し、どのエリアにボールが落ちたかを記号で入力していたが、瞬時に判断しないと間に合わない。こうした裏方の人たちがいることで、データ主義は成立している。そこをもう少しクローズアップしてほしかった。彼らの苦労や、ほかの国のチームの状況についても知りたかった。また、スポーツの世界では、ことばで表現することが得意でない人も多いが、為末さんは的確に話を引き出して、これからも楽しみだ。
- おもしろい内容だと思った。データがテーマの1つだったが、単にデータを紹介するだけの番組はこれまでもあったので、眞鍋監督自身が試合中に情報端末を使っていることや、データ入力に携わっている人がたくさんいることなどをクローズアップしていたら、さらにおもしろかったと思う。為末さんは人材としては適しているが、哲学者という位置づけがピンと来なかった。哲学者のような雰囲気歩いてる演出はいらなかったのではないか。
- スポーツにおけるセオリーをビジネスに置き換えるには、そもそもあるセオリーに当てはめ、枠組みを小さくして伝えないとわかりにくい。例えば、組織心理学やリーダーシップ、チームワークに特化したリーダーシップセオリー、チームワークセオリー、さらにモチベーションに焦点をあてたスポーツ心理学のセオリーなどもある。しかし、この番組ではどの部分に特化して、“勝利へのセオリー”として伝

えなかったのか、ポイントがぼやけている感じがして、もったいなかった。

眞鍋監督の戦略でいちばん重要なことは、トレーニングの5側面をとてもうまく使っていることだ。トレーニングの5側面は、スポーツ心理学の場合、身体、技術、戦略、心理、哲学の5側面を指導者がバランスよく鍛えることでトレーニングが可能になるというセオリーで、これはビジネスマインドの人たちに受け入れやすいもののひとつだ。この5つは、経営者や営業マン、新入社員や20代の人間にもわかりやすく当てはめることができる。

また、スポーツでは、監督自身が感覚で指導をしていることもたくさんある。たとえば、右脳と左脳の役割といったわかりやすい切り口にすれば、出演する指導者のためにもなり、番組もシンプルになる。科学的根拠のあるセオリーに当てはめて話を進めることで、為末さんの良さも出る。為末さんはプレーヤーとして極めた人だが、組織づくりについては一步下がった雰囲気が画面に出てしまっている。為末さんが極めた限界へ挑戦する力や、逆境対処能力が生きるような役割を考えていくことも必要だと思う。

- スポーツのセオリーについて、ビジネスからのニーズはあると思う。書籍でいえば、スポーツの世界の人のことばを多くの人たちが読みたがっている。それはスポーツノンフィクションやドキュメンタリーだけではなく、どちらかというビジネス書を読む人が読みたがる。ビジネス書を読む人は、自分がまったく知らなかったことを読みたいというより、自分がうすうす知っていたことを読みたいという特性がある。その意味で、まったく目からうろこが落ちることを示されるよりも、ある程度昔から言われていることを、いかに現代風に見せるかが、こういう番組を見たいと思う人のニーズに合うと思う。その点で、スポーツドキュメンタリーを期待する人からは物足りなく感じるかもしれない。しかし、ビジネス書を読み、経営学のこともおきたいという人にとっては、ほどよい理論があり、陳腐と評されるようなある意味“べた”な映像が含まれていて、“べた”であり陳腐であるということは、逆に最大公約数のところを取っていると思う。それはそれでよいと思った。

一方で、この番組が定時番組となるときの危惧が3つある。1つ目は柱の立て方で、番組内で立てられていた3本の柱が「戦略」「組織づくり」「決断」という広い範囲をカバーしているものになっていた。今後さまざまなスポーツ種目や人を扱っていくとしても、いつも同じような柱になってしまうのではないかという点。2つ目は選手からの検証が要らないのかという点だ。今回は28年ぶりのオリンピック銅メダルというパフォーマンスが物語っているので検証はなくても成り立っていたが、例えばこの理論で動かされた雇用者、ワーカーはどうだったのか、経営学としての関心で知りたくなる人もいると思う。3つ目は性別的な差異についてだ。女

性ならではの心理や、公平な人事であることを示すためにデータを取り入れたと読めるところがいちばんおもしろかったが、今回は一般の組織づくりに敷衍化していた。女性という個性を持った人に対し、どのようにパフォーマンスを上げさせていくかということは関心が高く、現在のビジネスの社会でもどう扱うかを知りたいところだと思うが、番組でそこまで踏み込んでいけるのか気になった。

- 優れた番組だと思った。ただ、強いチームになる最終的な要素は、選手の精神力が鍛えられるかどうか大きいと思う。その点で、データを駆使した戦略は選手の精神力の強さにどうつながるのか興味を持って見たが、最後までわからなかった。また、ロンドンオリンピックを見ていて、エースアタッカーの選手の調子があまりよくないと感じていたが、銅メダルをかけた韓国戦で、ほかのアタッカーにボールを集めたことは、別にデータを使わなくても試合の流れの中から自然に出てくる。データまで使ってその方針を示し、しかも、このような番組で詳しい解説があったときに、エースアタッカーの気持ちはどのようなものか。精神力を鍛えることとデータを駆使して、3位決定戦に至るまでは成功したが、これからチームがさらに強くなるための糧になるのかという点には疑問を感じた。

スポーツにもいろいろな種目がある。バレーボール、テニスのようにネットを隔てているスポーツと、レスリング、ラグビー、サッカー、ハンドボールのように体が接触する格闘的なものがある。また、単に勝敗だけでなく、いかに美しくプレーを仕上げるかという価値もある。スポーツの種目の違いによって人間の鍛え方は全く異なる。そのあたりも取り上げていくとおもしろい番組になると思う。

<放送番組一般について>

- 12月31日（月）の第63回NHK紅白歌合戦「歌で、会いたい。」を見た。楽団もステージからいなくなり、カラオケに近づいていると思った。新しいものを追いかけるのもよいと思うが、歌の番組と称する限りは、ときどき振り返って考える必要もあるのではないか。そうでないと、迷走するかもしれないと思った。
- 2月3日（日）のNHKスペシャル「沢木耕太郎 推理ドキュメント 運命の一枚～“戦場”写真 最大の謎に挑む～」を見た。沢木さんの書籍ではわかりにくく感じる場所もあったが、番組ではわかりにくいところを、CGを使った映像でわかりやすく見せていて、映像の力をつくづく感じた。番組は短い時間にもかかわらず、沢木さんが書いた文章とほとんど変わらずに伝えられていて、すごいと思った。

- 2月17日(日)のNHKスペシャル「なぜ日本人が・・・～アルジェリア人質事件の真相～」は、北アフリカという日本から離れた場所で起こった事件に対して、ここまで予算と人手をかけて取材することは、テレビではNHKでしかできないと思う。よくできていた。一方で、ゲリラの首謀者の自宅を訪れ、両親にインタビューをしていたが、日本人に対する謝罪を一言ずつ話ただけだった。せっかく現地まで行ったので、もう少し両親とのやりとりや生々しい証言、近所の人話などが聞きたかった。政府に取材が認められなかったなど、何か事情があったのかもしれないが、もし事情があったとすれば、そのニュアンスも入れるべきだ。せっかくよい番組で、あそこまでたどりついたのでに惜しいと思った。
- 2月10日(日)のNHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」はたいへんよい番組だった。放射性廃棄物という問題の深刻さのひとつは、人間の時間と放射能の時間の落差が途方もなく大きいことにある。人間の時間は、ライフサイクルではだいたい70年や80年くらいの時間のサイクルだが、“核のゴミ”は何万年という途方もない時間にわたって続く問題だ。このような深刻さをどうやって視聴者に伝えていくかがこの問題のポイントだ。1時間足らずのコンパクトな番組だったが、焦点がきちんと合っていて、わかりやすかった。国内の処分場選定の話だけでなく、イギリスやスイスの例も紹介し、単に日本だけの問題でなく、もっとスケールの大きい問題であることを提示していた。経済産業省の内部資料や、匿名による官僚の発言も取材できていて、説得力があった。これからも継続して放送してほしい。
- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」を見た。使用済み核燃料の処理ができない理由の1つは、核燃料サイクルによる再処理ができないことだ。番組では、その点について説得力を持って明らかにしていた。同じ日に、NHKスペシャル「終戦 なぜ早く決められなかったのか」を見た。官僚的であるがゆえに、それぞれの責任者が何回も会議を重ねながら結論をまとめられなかったということが大きな課題だと思った。原発の処理も含め、こうした検証作業を続けてほしい。
- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」を見た。使用済み燃料が原子炉建屋のプールに入ったまま膨大な量が積み上げられていて、ほとんど野放しのような状態であるということは、使用済み核燃料サイクル、再処理サイクルがうまくいっていないことを示している。番組ではその点を的確にとらえていた。大きな問題として指摘していたことを評価したい。原子力に関する最大の問題は、原子炉建屋のプールの中にばく大な量の使用済み燃料が保管されている

ことだ。原子力発電を再稼働するかしないかという以前に、早急に取り組まなければいけない問題である。もっと掘り下げ、繰り返しこの問題について特集を組んでほしい。外国で行われている燃料を鉄の容器に閉じ込める事例も示されていたが、そのような技術論も含め、こういうリスクを抱えていることを明瞭に事実として報道すべきだ。

- NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」はすばらしい番組だった。東京電力福島第一原発の4号機の上に燃料が置いてあり、隣の3号機の水素が入って建屋が爆発した。もし、あの燃料がすべて爆発すると、東京にも被害が及ぶというシミュレーションが紹介されていた。しかし、起きていないことをわざわざ紹介しないでもよかったのではないか。

(NHK側)

NHKスペシャル「“核のゴミ”はどこへ～検証・使用済み核燃料～」について、指摘のあったシミュレーションは、NHKがシミュレーションをしたわけではなく、政府が事故直後に専門家に依頼してシミュレーションしたもので、そうしたものがあるという事実として伝えた。原発の中のプールに使用済み核燃料があるということだけでは危険性が伝わりにくい。危険性を理解してもらい、この問題に関心を持ってもらうために、政府がシミュレーションしたことを紹介した方がよいと判断した。

- 1月26日(土)から3週連続で放送されたテレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」(総合 後9:00～10:13)をととても楽しく見た。全3回と最初に出たので3話完結とわかってよかった。大学生や社会人に学びの場を提供する取り組みを行っているが、そこで「メイドインジャパン」の話が出て、「同じように中国に渡った技術者を知っているが、とても生々しいドラマだった」という感想を言うひとがいて、すごいドラマだと思った。
- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」はおもしろかった。しかし、1人の技術者が会社を辞めて中国に行っただけで、果たしてあれだけの騒動になるのか、そんなケースが過去にあったのかと疑問に思った。それだけ能力の高い人だったという想定で、日中間で起きていることを象徴的に表現したのかもしれないが、現実の物事はもっと複雑に絡み合っていて展開していると思う。ドラマはそぎ落とさないと作れないのはよくわかるが、力を入れて作られていた作品だけに、ストーリー

の展開は若干現実味が感じられないところがあって、そのあたりは残念だった。

- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」は、物語としてはとてもおもしろかった。しかし、日本企業と一口に言っても、実際は株主の多くが外国人であったり、従業員が海外の工場の人であったりと、企業に国籍を付けて語ることがだんだん難しくなっている時代だ。ドラマとして描くときに、国家の威信をかけたせめぎ合いといった要素で描くのは違ってきているのではないかと感じた。
- テレビ60年記念ドラマ「メイドインジャパン」はドラマとしておもしろかった。かなりリアルな反面、家族にもスポットが当たっていて、登場人物の人間の厚みも描けていた。一方で、多国籍とか金融の世界についての部分がもの足りなかった。現在の日本企業では、ものづくりの技術者と四半期経営といわれている短期株主の間で、せめぎ合いをしている。ものづくり一辺倒では進めなくなっている国際競争は、リーマンショック以降さらに激しさを増している。例えば、2代目の社長に思い切った短期利益代表の役回りでも含まれていれば、リアリティーが増したと思う。
- ドラマ10「シングルマザーズ」について、現実と異なる部分もあるという声を聞いた。ドラマとして作る以上は、ある程度やむをえない部分はあると思うが、物語の終盤で、これまでドメスティックバイオレンスをしていた夫がある程度よい人になって明るさの見える終わりになっていた。現実はそのほど簡単なことではない。渦中にある人が、ドラマを見て期待を持ち、どうにかなると思ってしまうのが怖いという声も聞く。ドラマ10「いつか陽のあたる場所で」でもドメスティックバイオレンスのシーンが多い。いろいろな登場人物がドメスティックバイオレンスにかかわっていて、頻繁に夫からひどい暴力を受けている場面やエキセントリックな場面が出てくる。ドメスティックバイオレンスは身体的な暴力だけでなく、支配の構造で根が深いので、広く意見を聞いたうえで、作り方を考えてほしい。
- 2月10日（日）のETV特集「“ノンポリのオタク”が日本を変える時～怒れる批評家・宇野常寛～」を見た。ナレーションの“怒れる”ということばのアクセントに違和感があって、気になった。
- まる得マガジン「たった3分で若さ復活！これが正しいラジオ体操」を見て、一緒に体を動かしてみた。これまではラジオ体操は聞くだけだったが、映像で見ることにより、動作の方法がわかりやすく、とてもよかった。ラジオ体操をラジオで聞いている視聴者にも、より理解できる番組をラジオでも作ってほしい。

- 1月15日（火）のプレミアムアーカイブス ハイビジョン特集「ドキュメンタリードラマ 恋する一葉」を見た。大学生2人が樋口一葉にふんし、劇中で一葉のことばなどを反復していた。構成がうまく、感心した。
- 1月25日（金）のプレミアムアーカイブス ハイビジョン特集「さらば八月のうた 青春が終わる日」を見た。ある人気劇団が、26年間の活動を経て解散したことを取り上げていたが、青春が人生においていかに危険な時期かということを見事に表現していた。若いうちは、劇団に入って努力していればそこでは成功する。その中で、設立当初に主役を張っていた人が、自分の限界を知って30歳ぐらいで劇団を辞め、自営業となり現在は安定した生活を過ごしている一方で、26年間演劇を続けて50歳ぐらいになった劇団仲間が、いまからそれぞれ別の仕事に就かざるをえない状況を迎えていた。自営業に転身した人も呼んで、最後の公演を行っていたが、青春はいろいろなことができるものの、故に危険であるという、本当の青春が持っている意味を实によく描いているドキュメンタリーだった。
- BS時代劇「火怨・北の英雄 アテルイ伝」には、小説とミュージカルの印象が強いせいもあるが、期待を裏切られた。大和朝廷、大和政権、支配する側の論理、残虐性、価値観といったものが背景にないといけない。また、蝦夷（えみし）側の、北の大地の豊かな暮らし、自然と共生して生きる人間の価値観があって根本的な違いと対立がある。そのことが、蝦夷側の悲劇であり、つらく悲しい物語となっている。このドラマでは、戦国時代のように合戦の部分が中心で、そういったところの描き方が薄かった。全4回だったこともあるかもしれないが、もう少し時間を取って、深く掘り下げてアテルイを取り上げてほしかった。
- 1月27日（日）の宮崎局発地域ドラマ「命のあしあと」を見た。たいへんすばらしく、涙を流して見た。牛飼いの心情や心の軌跡、家族の心のストーリーをシンプルに描いていて、主人公のことばや、子どものことば、牛を守るための獣医が牛を殺している不条理を切々と訴えることばなど、それぞれの登場人物のセリフがすばらしくて感動した。きれいな映像だった。ただ、長靴と作業用の服が汚れておらず、新品のように見えてリアリティーに欠ける部分があった。
- 中国艦艇によるレーダー照射事件は、起きたときと発表の時期が少しずれていて、扱い方が難しい事件だったと思う。NHKでは全国ニュースのトップで取り上げていたが、新聞の場合は1面のトップにしたところもあれば、2番手ぐらいのところもあるなど、さまざまな判断があったと思う。このような問題は、大きなニュース性がある一方で、報道したことが跳ね返ってきてそれがプラスにならないかもしれ

ないという部分があり、政治的な配慮と両方の思惑の中で各紙も報道していると思う。NHKはどのような判断で報道したのか。今後も類似の事態が構造的に起こりうる可能性がある。そのときの報道スタンス、姿勢はどうなっているのか。中国の国営テレビ、CCTVとの意思の疎通、意見交換などを行ったことはあるのか。

(NHK側)

政治的判断は行っていない。最初に総理官邸で発表があり、防衛大臣のことば、アメリカの反応、日本の防衛省以外の反応、中国の反応、その他の反応など、取材したものを淡々と伝えた。大きなニュースなので、その判断からトップニュースとして出した。類似事態が起きた場合の判断は、総理官邸や政府の対応もさらにレベルの上上がったものになると思うので、われわれもそれに合わせた対応をする。是々非々、自然体で取り上げ、中国の言い分も正確に伝える。この件について、CCTVとの意見交換はしていない。

- 「ワールドWaveモーニング」で世界のニュース番組の主要なニュースを放送している。中国、韓国、フランス、スペイン、ドイツ、BBC、CNNなどのニュースが流されるが、NHKの代表的なニュース番組の「NHKニュース7」と比較すると、「NHKニュース7」のほうに違和感を持ってしまう。「NHKニュース7」の男性アナウンサーはすばらしい透過性のある声を持っていて、とても明快に耳に入ってくる。一方で、女性アナウンサーは声の透過性や質があまりよくないように感じる。同じニュース番組の中で、異なる基準で男性と女性のアナウンサーを選んでいるように感じる。また、各国のキャスターは十分にニュースをそしゃくしている。そういう気がするだけかもしれないが、そしゃくしている態度をうかがい知ることができる。そして、キャスター席に座ってニュースを支配しているように見える。そのあたりの安定感というか、知的な構成のしかたを「NHKニュース7」からは感じ取れない。構成をする側にどのような意図があって、アナウンサーを立ててニュースを伝えているのか。

(NHK側)

声の質は個人の資質で、男性アナウンサーの声は聞きやすく、鼻腔に反響する声だ。ゆっくり読むようにしているので、スピードは男性も女性もほぼ同じで到達度としてもそれほど変わらない。土曜日と日曜日のメインの女性アナウンサーは、政治や経済ニュースについての知識が深く、レベルの高いプ

レゼンテーションができるため起用している。また、キャスターの選定は、年に1度、放送総局のキャスター委員会で決めている。恣意的な選定ではなく、全体でオーソライズする形で選んでいる。声の聞きやすさ、聞きにくさは、聞いた人の年齢や使っている機材などによっても印象が異なるので、なるべく平均的に到達度が高くなるようにしている。

- 女性の視点が欠けている部分があるのではないか。

(NHK側)

キャスター選定の事前の段階で、アナウンス室の女性デスクがセレクションに参加している。そのうえで、制作部局から番組の特徴に合わせたキャスターの要望を受けてセレクトし、最終的な決定をキャスター委員会で決めている。

- スポーツの世界と同様に、女性のキャリアパスのアクティビティーがないと内向きになってしまう。男性と同じようにキャリアパスの範囲を大きくするべきではないか。

(NHK側)

全国にいるアナウンサーは、多くの視聴者に支持される番組に関与することがひとつの目標になっている。女性アナウンサーは早くそのような番組を担当したいという気持ちが強く、たいへん熾烈（しれつ）な競争の中で自分なりの訓練をしていると聞いている。そのことが、地域局で良い放送を出すことにもつながっている。競争という意味では、男性と変わらないのではないかと思う。

- その場合、スペシャリストとジェネラリストという点についてはどうなのか。

(NHK側)

番組によって異なる。たとえばEテレの「サイエンスZERO」を担当しているアナウンサーは男性も女性も科学の分野にたけた人材だ。それぞれ、向き不向きもあるので、スペシャリストについては、本人の専門性などを考えて意識して配置している。

(NHK側)

ニュースキャスターは、立っている番組もあるし、座っている番組も両方ある。「NHKニュース7」や「NHKニュース おはよう日本」は立っているが、「ニュースウオッチ9」は座っている。昔のNHKのニュースは座って読んでいた。それは、今ほどテレビが発達しておらず、映像も1枚の画像で、ほとんどラジオと同じニュース原稿を読んでいるだけのスタイルだったからだ。現在のように、さまざまな映像を使い、大きな画面で説明するには、キャスターが立っている方が動きやすい。「ニュースウオッチ9」のキャスターは通常座っているが、対談するときなどは大きな画面を挟んで、立って話すことがある。そこは演出を考えながら行っている。

外国のテレビはとてもシンプルな作りで、だからストレートに伝わるというよさはある。NHKのニュースについては、「テレビの特性を生かしてわかりやすく伝えてほしい」という視聴者の声に応じて、現在のスタイルで行っている。その点は賛否を含めて、いろいろな意見があると思う。現在の演出は、財政や外交の問題など、原稿を読んだだけでは理解しにくいものを、小道具や大画面を使って見せる工夫を行っている。原稿も、政治部、経済部、国際部などのさまざまな部から来たものをいったん整理し、画面に合うように書き直している。BBCやCNNは座りながら伝えているが、小道具や大道具を使わないため座ってられる。どちらがよいかは、視聴者の意見も取り入れながら、今後、議論して考えていきたい。

- 手話放送について、手話をしている人の横に出る2行の字幕で、2行目のルビが左側に出るのは少し違和感を覚えたが、これが、聴覚障害のある人にとっては一般的なものなのか少し気になった。

(NHK側)

手話放送のルビについては、手話放送を利用する人たちの意見をもとに、読みやすさ、見やすさに配慮して実施している。文字が2行あるときに、右側の漢字のルビは右側に出し、左側の漢字のルビは左側に出している。一見すると珍しく見

えるが、平仮名、漢字、平仮名、漢字と配列すると、漢字だけを読む人に読みにくいとか、漢字の両サイドにルビがあると、どちらのルビかわからなくなるという意見などに配慮したものだ。

- 番組のタイトル文字について、力が入っていないものを見ると“NHKっぽい”という印象を受ける。何となくフォントを使い、何となく色を付け、番組の文脈に合っていないものを安易に作っていないか。フォントの選定や色の付け方、デザインなど、民放局に比べてかなり見劣りする。
- 照明について、いくつかの番組で女性の目のあたりに強い影が出ているのが気になった。もう少し影を消し、見ている人に見やすくする方がよいのではないか。
- テレビに出演するときに、頭を下げたりお辞儀をする必要性について少し気になった。美しい立ち振る舞いについて、NHKがお手本となる動きを定めると、見ている人が美しい所作を感じられると思う。

NHK編成局
番組審議会事務局